

第二期 第一〇九号 (二版) (無料)

音信不通

本のビオトープ

学びあう人々のために

2025. 08. 10 定有堂書店 発行

『ヘリヤ記 II 《結び手》』を語る 奈良 敏行

えっ、なぜ今、フッサール？ 岩田 直樹

「本のある場所」日記二〇二五年七月 南陀楼綾繁

アーカイックな方へ 松田 裕史

怒り(境界)生命 板野 田香

最近の脳内自動再生曲 おぎはらきえ

日々是雑言(ぞつじん) 萩原 俊郎

Stop, Look, Listen (To Your Heart) 高木 善祥

本を作る側から 村瀬 謙介

内坪井町日記 (15) 齊藤 仁昭

論語について (3) 小原 修治

究極の臍の緒 古賀 啓三

夏を飲む ムラカミヒロミ

この空の下で生きていく。 三浦 永理

氷 あきの素生

「案内」 ドラメリア

『ヘリヤ記 II 《結び手》』を語る

奈良 敏行

(定有堂 主人)

ベールグル喫茶「森の生活者」で、白井明大さんの『ヘリヤ記 I 『声たち』』に続く新作、『ヘリヤ記 II』を語る会が行われた(二〇二五、七、二七)。聞き手はわたしが勤めた。

作品はファンタジーで四部構成になっている。主人公のリンゼイは試練を乗り越えて「結び手」となる。《声たち》と世界を和解させる役割だ。リンゼイは疲労に襲われ、手当するために行政府のある洲(しま)へ運ばれる。体も癒えた頃、動燃炉が暴走した浮遊推進のバス状の「フタコブ」に乗っている「博士」を救出に出動する。かろうじて成功する。

数日して、博士に従って「崩落地」へ行く。そこには何か形のない邪悪なものが存在し、博士は自作の探査ロボットを突入させる。しかし、この両者はダメージを受ける。リンゼイは青の邑(むら)へ博士を運ぶ。無事回復する。

そこで博士は『ヘリヤ誌』を見つける。

話の入口として、そのように見取り図を作る。しかし白井明大さんのファンタジーの核心はそこにはない。要約からこぼれ落ちたところに作品の世界は広がっている。聞き手のわたしは、どのようにしてこの架空の空域へ踏み込めるのか迷った。

結局三つの方法を思いついた。一つは詩人の作品なので、詩の朗読が入口の扉を開くという思いつきだ。伊民公恵さんが、白井さんの詩作品を朗読する。情感の籠もった朗読なので、それだけで我々は別の世界に運ばれてしまう。

次にこのファンタジーワールドの地図が用意されているので、建物や地域名、河川、丘陵、それら一つ一つを理解・解説することに時間をたっぷり用意した。この世界のものに似ているが、成り立ちが異なる象形物だ。細部を知ること、空間の広がりや親しみのあるものとして、空域に入っていくことができる。

三つ目は、時間軸で登場してくる見慣れない事物、見慣れない作用を理解していく。出合いの積み上げで全体に慣れ親しんでいく。

いろんな変異的な事象が登場するが、『ヘリヤ記』のときに、白井さんは、それらは説明的にこの時間軸の進行の中で回収される必要はないと言った。すべては「ヘリ

ヤ記 詩篇」という預言の書の中に終了している世界だからだろうか。そのように誤読してみたくなる。

エピソードの「詩篇十一」に、この世界を見つめる声が語っている。

《そうだけで あるだけで

ずっと いのちが暮らせるように》

この言葉だけが確かなもので、じつはすべては終わってしまった物語なのかもしれない。これも逸脱したわたしの空想だ。

後成（エピソード）は好きな言葉だ。すべての目的は最後に現れる。「ヘリヤ記」の事象は明示的に説明されるべきものではない。説明し回収した果てに「預言」に到達できるものでもない。忘れてならないのは、この作品が詩人の仕事だということだ。

最後近く、リンゼイの歌声が突如解き放たれる。

《ふれようとすることは

ふれるための

問いかけの仕草

はじまりの足踏み》

じつは、前の二行は、次の二行に行為的に接続しない。「足踏み」なのだ。白井さんの詩にはこの「足踏み」が効

果的に現れる。この場所をはっきり理解することによって、前の二行は出口を失っていることが知れる。別の次元の営みなのだ。預言の世界に属する言葉なのだ。詩の言葉は必ずしも現実に着地しない。ここに着地しないから詩の言葉は時空を越える。預言とはそういう意味だ。

ファンタジーは「意味」に回収されるものではない。ファンタジーの感想は人に語らない方がいい。意味には裳裾(もすそ)がある。意味的に捕らえたと思っただ瞬間に、そこからぼれ落ちる、うっすらとした雰囲気の間がある。明示されないものが大事なのだ。「ヘリヤ記」の事象を考察する。しかしそこに「ヘリヤ記」の最終到達の極北はない。この世の物語ではないからだ。

何度でもゆっくり繰り返して読む。そしてそこに何が語られているかは誰にも話してはならない。

2025. 07. 26

白井明大 『ヘリヤ記 II 《結び手》』 詩之友社 2025

奈良敏行十三砂慶明編

『町の本屋という物語』 定有堂書店の43年』
作品社 発行 2024. 2



奈良敏行十三砂慶明編

『本屋のパンセ』 作品社

二〇二五年三月五日刊行



えつ、なぜ今、フツサル？

岩田 直樹

〔再解釈本論・「読む会」講師〕

自宅と職場を結ぶルート上に、鳥取では一番大きな本屋、家電量販店、ハンバーガーショップ、ネットカフェなどが集まっている区画がある。その一角のATMに行くついでに本屋に立ち寄ることがある。

七月上旬、新刊書、人文書、新書のコーナーを巡って出口に向かおうとしたとき、NHKテキストの棚に目が留まった。あれっ、こんなところにフツサル？

Eテレ「100分の名著」のテキストが数冊並んでいる。まさか、哲学の中でも難解さの頂点に立つと言っているフツサル現象学を取り上げるはずはなからう。近寄ってよく見ると、表紙には『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』の大きな文字が躍っている。いくら視聴率を気にしなくともいいEテレでも、哲学業界で『危機』書と呼ばれる未完の書の解説番組を放映するとは、その心意気と勇氣(蛮勇?)に大いに感服する。

「100分の名著」をウイキペディアで調べると、二〇

一〇年九月『資本論』（的場昭弘解説）、翌年一月『ツアラトウストラ』（西研）のパイロット版の後で、二〇一一年五月『論語』（佐久協）から現在までレギュラー番組として放映されている。番組一覧には古今東西の思想、哲学、文学などのよく知られた名著が並ぶ。

放映リストの中で、『危機』書は孤高の存在である。まずは有名でないこと。現象学のシンパである私は名著だと評価するが、現象学に対立、あるいは現象学を無視する立場からは名著だとは考えられていないだろう。さらには超難解であること。第一回（再放送）冒頭で司会の伊集院光が「『100分の名著』史上、最も難しい本だ」と語っていたのは、まさしくその通りだと思う。

一五年目の「100分の名著」の中で、私がテキストを買って番組を観たのは、今回で三回目だ。『資本論』（斎藤幸平解説、二〇二一年一月）、ナオミ・クライン『ショック・ドクトリン』（堤未果、二〇二三年六月）は、宇沢弘文による「社会的共通資本」論の参考にするために視聴した。その成果は拙著『宇沢弘文「社会を治す」』（二〇二四年）に活かされている。

斎藤は、脱成長コミュニケーションズ、コモンス再生の観点から、堤は、天災や戦争、パニックなどの混乱を利用して、新自由主義経済システムを導入する惨事便乗型資本主義の観点

から、現代社会・政治に鋭く切り込む。

トランプ、プーチン、ネタニヤフらが好き放題に世界を混乱に陥れている中、『資本論』と『シヨック・ドクトリン』が今読むべき本であることはよくわかる。しかし、『危機』書と現在の世界情勢を結ぶ何かがあるのか、と問われても、私は明確に答えることはできない。

哲学用語を交えて、『危機』書の内容を小難しく要約してみよう（引用は細谷恒夫・木田元訳、中央公論社一九七四年、中公文庫あり）。

一九三五年のウィーン、プラハでの講演と遺稿を収録した『危機』書は、近代における物理学の客観主義と超越論的主観主義との対立に引き裂かれている諸学の起源を探るフッサールは「ガリレイによる自然の数学化」が今日の諸学の危機の淵源であると断定する。不精密な「学以前の、また学以外の生活世界」を精密な測定術に依拠する「理念の衣」が覆う世界の「間接的な数学化」「世界の理念化」は、理念によって偽装化された世界を私たちに真の存在であると思ひこませる。ガリレイは「発見する天才であると同時に隠蔽する天才」であった。

生活世界は「根源的な明証性の領域」、客観的—学的世界を「基礎づける基盤」である。共時的相互主観性の基盤、直接的な感覚的世界の究極の基盤であると同時に、文化的

な成果が流れ込む歴史的な環境世界でもある。しかし、『危機』書における他者構成の筋道は破綻している。独我論的色彩が払拭されていない。

生活世界論の提唱とともに『危機』書で特筆すべきは、ナチズムの狂気の嵐によって迫害された老ユダヤ人（一九三八年に死去）による「理性」への信仰告白である。哲学者は「人類の公僕」であり、「自己自身を—しかも、存在する世界として、その普遍的真理の全体において存在する世界として—理解する理性にゆきつかんとするたえざる闘いのうちに生きているのである。」

西研は、現象学を「共通理解をつくり出す哲学」と解釈する。全四回（×二五分）のテーマはそれぞれ「学問の『危機』とは何か」「科学の手前にある豊かな世界」「現象学的還元によって見えるもの」「現象学で何ができるか」である。西は現象学から「自由と承認をめぐる人間像」「幸福から出発する社会構想」を導き出そうとしている。フッサール他者論をアーレント的に読み込んだ勇み足とも思える記述が散見される。

『危機』書はフッサールの「白鳥の歌」である。フッサール現象学の再解釈、フッサール入門として、このNHKテキストは興味深い。

「本のある場所」日記 二〇二五年七月

南陀楼綾繁

(ライター・編集者)

7月5日

3月半ばに急に気持ち落ち込み、以来2カ月以上、自宅に引きこもって何もできない日々がつづいた。本誌の文章も一行も書けず、休載が続いた。文字通りの「音信不通」になってしまった。

復調してくると、外に出たい気分になった。今日は東村山市の〈丸木美術館〉へ。改修工事のため9月末から長期休館する。休館前の最後の展示となったのが「望月桂 自由を扶くひと」展だ。気づいたのが遅く、最終日の前日に駆け込んだ。

望月は絵を描きながら大杉栄らアナキストと交流し、谷中に〈へちま〉という大衆食堂を開いた。千駄木に住んだ時期もある。展示は多彩な活動を伝えるが、私的には生活が厳しくなった時に友人が望月を励ます会みたいなのを開いているのにグツときた。会場では入場者に「展示ZIN E」を無料配布。この内容やデザインが素晴らしい。また、望月が中心となった黒耀会の機関紙『黒耀』創刊号の複製

も配布していた。

バスで東松山駅まで戻り、駅前の中華料理屋で昼食。東武東上線で池袋へ。汗だくになって〈古書往来座〉に行き、店員ののむちさんと駄弁りながら本を眺めていると、『生誕110年 濱谷浩展 人間と風土をみつめて』という図録を発見。先月まで上越市の〈小林古径記念美術館〉で開催していたが行けなかった展示だ。ありがたく買う。

そのあと、〈T.O.H.Oシネマズ〉で李相日監督『国宝を観る。ロコミで大ヒットしているだけあり、満席だ。主人公と、彼の表裏の関係になるライバルが、どちらも愚かな行為の末にひとつの道を究めるといふ展開に、胸が熱くなった。終わって、池袋駅から西日暮里駅行きのバスに乗って帰る。久しぶりのお出かけだったので、疲れた。

7月24日

千駄木の信陽堂アトリエで、「嶋田奈穂子さんを囲む会『看取られる神社』ができるまで」を開催する。同書（あり出版）は、集落の衰退により神社がどういふ運命をたどるのかを描いたもの。これから各地で起こるだろう問題に切り込んでいる。

今年初めに読んでから、なんとなく勝手に応援団を買って出て、いろんな人に勧めて回った。著者の嶋田奈穂子さ

んが滋賀から上京する予定に合わせて、話を聞く場を設けた。

私が本書と出会うきっかけになった福島県昭和村の本屋〈燈日草〉の菅家洋子さんが、昭和村で栽培されたかすみ草を会場に贈ってくださっていた。

このアトリエにはキャパオーバーの15名が参加。前半は写真を見せながらの嶋田さんのお話。本書を書くに至る根っここの部分を、当時の逡巡も隠さずに語る、とてもいい話だった。後半は嶋田さんが持つてきてくれた滋賀のコーヒーや紅茶を飲み、お菓子をつまみながら、参加者を変えて話をする。鋭い質問や指摘も多く、嶋田さんはあとで「勉強になった」と何度も話していた。本屋が会場のトークではこういう時間は持ちにくいので、少人数の茶話会という形式でよかった。

よみせ通りの〈喫茶ニト〉の夫妻も参加。翌日店で聞いたら、「とてもよかった」と云ってもらえる。私が同書を勧めたら、すぐ〈往来堂書店〉に注文して買ってくれた人なので嬉しかった。

企画から会場、集客、進行、打ち上げまで一人でやるのは久しぶりだった。手間はかかって大変だけど、やっぱり面白い。自分はこのことが好きなんだと再認識する。こんどは別の著者、別のテーマで企画しようと思う。本を

つくったり書いたりすることとは別に、こういった場をつくることである程度の収益を得る方法はないかと画策中だ。

7月27日

岩波書店のPR誌『図書』8月号に、1980年代に角川書店が出していた雑誌『バラエティ』についての文章を書いた。また、新潮社のPR誌『波』8月号では、『火垂るの墓』の原作（野坂昭如）とアニメ映画（高畑勲）を比較して論じた。どちらも戦後80年特集。

こういった仕事は、テーマとしても時間的にも、雑誌という場があるから成立すると思う。限られた時間で準備をするのは大変だが、そのギリギリの焦りのなかで瞬発力が生まれる。これが雑誌の仕事の醍醐味だろう。

引きこもりになった背景には、経済的な危機感があるが、書き手として認められていないという思いも強くある。だけど、好きな雑誌に原稿を書いて、編集者にちよっと褒められると元気になってしまうので、いい気なもんだと自分でも思う。

アーカイツクな方へ

松田 裕史

(高校教員)

山中司先生(立命館大学)のAIに関するオンライン講演会を実施してから三日後、小中学校の先生向けの公開授業をした。一人一台端末となったこともあり、授業でどのようにICTを利用するか、生成AIをどのように効果的に使用させるかが喫緊の課題となっている。文部科学省をはじめ各都道府県でも生成AIが議論の中心、予算の中心となっており、さながら生成AI祭りのようになっていく。

一方、僕の授業はと言えば、生徒に端末を使わせることが、ほほえない、クラシッくな授業形態だった。参観された先生方はもしかしたら、松田はICTや生成AIに疎いのではないかと思われるかもしれない。否、僕はミーパー的なこともあり、人並み以上にICTや生成AIには関心を払ってきた。教育の分野でも雨後の筍のようにChat GPTの使い方を指南する指導書が出版されている。この一年、目ぼしいものには目を通してみた(『英語教師のための生成AI入門ガイド』『英語教師のためのChat GPT活

用ガイド』『英語教師のためのICT&1人1台端末「超」活用法・応用編』『英語教師のためのICT&1人1台端末「超」活用法・基本編』)これら四冊以外にも昨年、ChatGPT関係は数冊目を通してきている。それでもなお、実践した授業はクラシッくなスタイルを堅持することになった。それがいかどうかは分からない。ただ、授業後のミニ講座で僕が伝えたことは、すぐに役に立つものはすぐに役に立たなくなる、最高の教育環境はTeacher自身、教育の流行だけでなく「不易」もアップデートしましょう、ということだった。ICTは使おうと思えば使える。しかし、何のために使っているのか分からない例も多く、使わなくても紙やノートでも不都合はないのでは?と思わされることも少なくはない。Canvaも登場し、巧みに扱う教員がCanvasatorとしてもはやされている。確かにとてもカラフルで集中力の持続時間が短くなりつつある児童生徒向けのツールではあるが、学びが劇的に変わるとは思えない。学びにおいて大切な「問い」にはほとんど関連していないように思えてならない。

「ICTをどのように使えばよいか分からない。効果的な使用法を知りたい。」という質問を教員側からよく聞く。僕の中にはそういう問いはない。使う必要がないから使わない、それだけである。手段と目的を混同してはいけない。

教育学者の溝上慎一氏も、ICTが学びを劇的に変えることとはないと断言されている。藤村亘之先生(東大)にも直接、ICTや生成AIについての見解を直接尋ねたが、「知識・技能」の面では使えるが、「思考・判断・表現」の面ではアナログが良いということだった。

様々なツールが毎年、教育現場にも紹介され、対生徒に対しては個別最適化、協働化、対教員に対しては効率、業務改善、働き方改革が促される。そんな時代の潮流の中で、僕はクラシックに回帰しつつある。昨年読んだ本で今でも記憶に残っている本は生成AIの本ではなく、『授業を研ぐ』『道徳授業』『エンゲージメントを促す英語授業』『エンゲージメント×英語授業』の四冊である。いずれも、教育の不易、本質、本懐に触れる内容だった。

目を海外に向けてみよう。IT先進国のスウェーデンでは、二〇〇六年に早くも学校において一人一台端末が実施され、デジタル教科書が導入された。ところが、二年前から脱デジタルに移行しつつあるというのだ。理由は明白で、OECDによる国際学習到達度調査(PISA)において、「読解力」「数学的応用力」「科学的応用力」の全てで前回調査より順位を下げたからである。日本の教育現場でやっとデジタル環境が揃いつつある中、他国ではアナログへの回帰が始まっている。海外を闇雲に模倣する必要はないが、デ

ジタル環境が学びにどのような影響を与えているのか検証すべきである。

『町の本屋という物語』のP.122にアーカイック、オリジンという言葉が出てくる。「小さな本屋は、余計なものをそぎ落として、自分の立ち位置へと回帰していきます。

『オリジン』なもの、『アーカイック』なもの、最初の志、情念のようなものを、見出せるか否かが、大事な何かのようです。「アーカイックという言葉はずっと気になっていたのだが、『町の本屋という物語』読書会の一か月後にやった僕の授業もアーカイックそのものだった。同じページの始まりには次のようなことも書かれている。「多種多様なものを用意することが大事なのではなく、何を捨てるか。この場所がこの場所であるのはなぜか?そんなところを突き詰めるところに、実は大きな起爆点・成長点がある、という考えかと思えます。大きな書店は、その環境への進化適応ゆえに、多種多様な要求に、全方位的に適合し、どんどん巨大化していきます。勝ち抜き競争です。」「何でもある」から「どれでもある」、そんな時空間を教育現場で創出できるだろうか。

怒り／境界／生命

板野 田香

(薬剤師・岡山県在住)

七月の定有堂教室「読書室ピオトープ」の課題本は、カズオ・イシグロの『クララとお日さま』だった。選書者は「音信不通」にも寄稿している三浦さん。SFという構造を取りながらも、〈愛〉や〈生きること〉について考えさせられる良著であった。

物語は、人工親友 (AF: Artificial Friend) であるクララの一人称で語られる。クララは子供の健全な成長を促すために造られたロボットで、やがて病弱な少女ジョジーに選ばれ、彼女と生活を共にすることとなる。

意見交換の場では、社会格差や断絶について、AFの信仰や救済などが議論に拳がったが、私が特に興味を持ったのが〈怒りの欠如〉という点だった。

前述のとおり、小説全体がクララの視点を介して認識された世界であるため、詳細な社会構造や階級、そこに至る歴史など、クララの知覚外の出来事については語られない。

つまり、世界小説としては機能していない。その制限性に実験小説としての面白さがあるのだが、其れにしても、奇妙なまでに〈怒り〉という感情が欠如しているのだ。作中でクララは、幾度も不当な扱いを受けたり、冷たい言葉で浴びせられたりするのだが、決して声を荒げず、純粹で透明なまなざしを保ち続ける。その姿に、「理想的な協働者／成熟した精神」といった印象を抱く。

最初はクララが精神的に成熟しているため、このような反応をしているのだと思った。が、読み進めてその応答の一貫性を考えると、これは単なる個体の性格ではなく、AFの設計段階において、〈怒り〉という構造を備えないよう設計されたのではないかと感じるようになった。

多くのSF作品において、「怒りを持つ機械」はしばしばアイデンティティの体現として描かれる。たとえば、『ブレードランナー』のレプリカントたちは、理不尽な搾取や命の期限に対して怒りを露わにし、自らの存在を証明しようとする。『エクス・マキナ』では、人工知能のエヴァが創造主を欺き反乱を遂行する。いずれも、感情を持ち「従順な道具」という枠組みを越えはじめたときに、その存在は脅威へと転じるのである。

アシモフが定めた「ロボット三原則」は、人間と共存を考える上で重要な基本原則であり、次のよう定義される。

《一・ロボットは人間に危害を加えてはならず、二・人間の命令に従わなければならず、三・自己保存も第一・第二條に反しない限りで許される——》

であれば、行動の段階で制御をかけるよりも、そもそも思考の段階で怒りが芽生えないよう設計する方が手取り早い。怒りという感情が発生しないようなスキームを採用すれば、危険因子そのものを初めから排除できる——この原理の延長にクララの存在があるのだろう。怒りを抱かないように設計されたクララは、決して反乱を起こさない。だが裏を返せば、生の欲望を持たないことでもある。物語は静かな余韻を残す結末で終わるが、その不自然なまでの透明性こそが読者の心を打つ。

さて、〈怒り〉をテーマとして、クララと対極の少女を描いた『サーチ・アンド・デストロイ』（著：カネコアツシ）という漫画がある。手塚治虫の『どろろ』をSF風にアレンジした作品で、義体で生きる少女・百（ひやく）が、自らの臓器を取り戻すまでを描く。育ての親である九十九（つくも）は「生きるために怒れ！」と彼女に説き続け、この言葉は、彼の死後も百が生きる糧となった。

怒らないまま、静かに朽ちていくクララと、怒ることを生を取り戻す少女。この二つの物語を並べてみると、〈怒り〉という感情は、単なる善悪や成熟・未熟の問題では測

れないことが見えてくる。哲学者のアルベール・カミュは、自身の著作で「反抗する」ということは、ある境界を引くことである」と論じた。不条理に対して境界線を引く行為は、最も素朴で切実な私たちでの自己主張ともいえる。つまり怒りは、単に攻撃的な情動ではなく、生への執着であり、自己境界の形成や主体性の始まりでもあるのだ。もしクララに怒る力があつたなら、別の結末があつただろうか。其れとも「不都合な存在」として、やはり廃棄されてしまったのだろうか。そんな余韻が残る。

ところで、スター・ウォーズのC-3POを存じだろうか。彼は珍しく、怒りも持ったアンドロイドだ。作中では「誰も私の話を聞いてくれない」と不平不満を漏らし、ハン・ソロに部品を外された時には「礼儀がなっていない」とプンスカする。かと思えば、ちよつとした段差で躓き、危機的狀況で「私たちは確実に死ぬ！」と取り乱す。

この「いら立ちを抱えたポンコツ」は、無害どころか愛嬌すら感じる。もしかすると、怒りや自己主張を人間に受け入れさせるには、こうした「ポンコツさ」が必要なのかもしれない。知的で、共に悩み、たまに怒る。そんな「少しだけポンコツなクララ」も良いな、と思う。

最近の脳内自動再生曲

おぎはら きよこ (蔭山)

先月はコッポラ監督の『地獄の黙示録 ファイナル・カット』再上映のニュースをきっかけに『The Doors』の『The End』が延々と脳内再生されていたが(詳細は音信不通108号に書いた)それは徐々に落ち着いて、最近では『Green Day』の『American Idiot』が再々流れる。

アメリカのロックバンドGreen Dayのアルバム『American Idiot』はイラク戦争が起った二〇〇四年に発表された、一曲目がアルバムのタイトル曲になっている。直訳すれば「アメリカ的まぬけ」か。* Don, t wanna be an American idiot, ぶじぶリーズで歌い出し、* And can you hear the sound of hysteria? (ヒステリックなぎわめきが聞こえるだろう?) * Welcome to a new kind of tension, (新たな緊張状態へようこそ)など戦争に突き進む当時のブッシュ政権やそれに熱狂するアメリカを揶揄する言葉が歌われている(訳は筆者の直訳)。しかし歌詞も刺激的だが、曲もライブハウスで聴きたくなるようなシンプルながらパワフルなバンドサウンドで、パンクでロックでかつこうこう。他の収録曲も『Holiday』などノリが強い曲、『Wake Me Up When September Ends』などじっくり聴かせる曲も

あり、とにかくアルバム自体がすごく良い。イカす。好きだ。

そう評価しているが、ここ数年まともに聴いていなかった。最近繰り返し思い出すのは連日のトランプ大統領関係の報道のせいだろうか。就任前から話題に事欠かなかったトランプ大統領だが、SNSでの自画自賛の投稿、上げるだの下げるとの延長するだの言っている関税問題、どこまで本気がわからない彼のコメントで株価が上がっただの下があっただの、連打されるニュースに驚き呆れさせられ、『American Idiot』が浮上してきたのだろうか。今年五月、教皇選挙の開催を前に次期ローマ教皇は誰がいいかという記者団からの問いに「私が教皇になりたい」と答えたと言ったときは街頭インタビューに答えた酔っ払いかよと思っ

た。

大統領選のときには、テレビの討論会でハイチからの移民が多いオハイオ州スプリングフィールド市にふれて「移民が犬や猫といった住民のペットを食べている」と発言したり、差別や偏見を助長するような発言も多い。

定有堂教室の読む会で二〇二四年九月に読んだ浜忠雄『ハイチ革命の世界史』(岩波新書)はタイトルの通りハイチを中心に据えながらアフリカからの黒人奴隷の流入、植民地支配をしていたフランスの革命(フランス革命)の

影響などが書かれており、ハイチだけの歴史に収まらない、まさに世界史。下手に世界史の教科書を読むよりも、こうして一つの国の歴史から学んでいく方がおもしろいかもしれないと思った。しかしそれだけ大国に翻弄されてきた証拠で、ハイチはまだまだに貧しく政情不安定な状況だ。先のトランプ氏の討論会での発言にはハイチの外務省は差別的発言だと懸念を示す声明を発表し、外相も非難のコメントを出した。

たしか中学生のときの社会の教科書だったと思うが、アメリカは多人種国家であるという説明と共にヨーロッパ系、アフリカ系、ヒスパニック系、アジア系とルーツが様々であろう学生が五人くらい集まってにこやかにしゃべっている写真が添えられていたのを覚えている。なんとなくその写真を真に受けてアメリカではいろんな人種の人々がみんな仲良くやっているようなイメージが植え付けられたんだと思う。トランプ大統領の政策や発言を聞いて、最近になってようやく「あの写真はウソだったんだ」と思うようになった。別に教科書の本文に「仲良くやっています」とは書いてなかっただろうから「ウソ」とは言い過ぎだが、視覚から得た情報で仲良くやっているようなイメージを持っていた（持たされていた？）私の認知バイアス。ハリウッド映画もよくよく見るとナチュラルに白人優位で有色人種

は補佐的立場か先に殺されがちである。

この原稿を書くのに改めて「Green Day」でネット検索してみたら今年一月二十五日付の billboard JAPANの記事に当たった。現地時間一月十九日にGreen Dayが南アフリカで行った公演で『American Idiot』を演奏した際『「I, [≡] not a part of the redneck agenda (レッドネックの計略には加担しない)」とこう歌詞を「I, [≡] not a part of the lion agenda (イーロンの計略には加担しない)」と言い換え、プレトリア生まれの億万長者、イーロン・マスクを直接的に批判した』そうです。ちなみに元の歌詞の“redneck”はアメリカ南部の野外労働で首が日に焼けて赤くなっている白人労働者の蔑称で、転じて保守的な貧困白人層を指す、そうです（ネット情報）。

さらにこの記事によると、彼らは二〇二三年に行った公演ではこの部分を「GAMAの計略には加担しない」と歌ったそうだ。かっこいい。イカす。好きだ。リリースから二十年経てなおこの健在ぶり。さらに汎用性も広がっている。日本では参議院議員選挙の結果が出た。

Welcome to a new kind of tension.

日々是雜言（ぞうごん） 7

萩原 俊郎

（倉吉市在住者）

日ごろ気になることを、つれづれなるままに。

ダチョウのシュトラウス

参院選投票日の20日夜から翌日まで、一切テレビを付けず、新聞も読まず、ユーチューブで軽キャンピングカーの紹介や、バークレー音楽院に12歳で入学した天才少女ジャズピアノリストの演奏などを視聴して過ごした。

まるで、エーリヒ・ケストナーの絵本に登場する「ダチョウのシュトラウス」みたいな状態。

「飛ぶ教室」「エミールと探偵たち」で有名なケストナーは、ドイツ敗戦後の1949年、『動物会議』という絵本を書いた。子どもたちを苦しめる戦争と貧困はやまず、大人たちの国際会議はなんの成果もあげない。

そんなひどい現実を見たくないシュトラウスは、ダチョ

ウの習性として「地中に頭を突っ込んでしまう」。つまり「プチ現実逃避」するわけですね。

絵本では、怒った動物たちが一致団結して、世界中の子どもをさらってしまう。「人間の法律には、役に立たない親からは親の資格を奪っていい」という定めがある。きみたちの政府はこの数百年このかた、もうその任務をはたす力がないのだ」。象のオスカルは人間に最後通牒を突き付けた。今でも通用するロジックだ。

で、「ダチョウのハギハラ」の方は、ずっと地中に頭を突っ込んでいるわけにもいかず、恐る恐る地上に頭を出したら、選挙結果は予想した通りだった。嗚呼。

ちなみにダチョウに「地中に頭を突っ込む」という習性はなく、ドイツに伝わる通説が誤りだったらしい。

あっけらかんと「八紘一宇」

ともかく、選挙結果は予想通りだった。与党の自民、公明に限らず共産、社民の既成政党は退潮。立憲民主は横ばい、維新は賞味期限切れ、ポピュリズムの国民民主と参政党が異様な伸びを見せた。「やっぱりなあ」

こうなるだろうとは思っていた。前回表明したように、生まれて初めて自民に投票した。石破政権には党内極右へ

の「歯止め」として今しばらく頑張ってもらいたい、というぎりぎりの選択だったが、自民党内はすでに「石破おろし」が吹き荒れている。下野政権を手放す声も出ているが、どの野党がマウントを取るかという液状化、不安定化した政権では、確実にポピュリズムが台頭する。

日本で怖いのは、独のAfD、仏の国民連合などの欧州の極右政党と違い、最大多数の党（自民）内に高市ら極右勢力がいること。そして有権者も「無党派層」というより、保守とリベラルと左翼の違いも分からない「政治的無知無関心層」が増加、つまり劣化が進んでいることだ。

たとえば参政党の政策の柱にあった「八紘一宇（はつこういちう）」。日本が祖先から受け継いだ：世界が一つの家族として、平和に暮らす理想」とある。「アメツチヲオホヒテ イエトナス」。紛れもない戦前の「大東亜共栄圏」の侵略のスローガンだ。それも知らない有権者は「みんなできてる政党」といった言葉に騙され、戦後80年、こんなものがあつげらんかと世に出てくる。

こんな時は塩野七生

ダチヨウには失礼だが、再び地中に頭を突っ込みたくなつた。こういう時は塩野七生さんの『ローマ人の物語』（新

潮社刊）でも読むにかぎる。

大手銀行系の資産運用会社のサイト（三井住友DSアセットマネジメント）で、興味深いコラムを見つけた。「トランプの一連の『とんでも発言』は予測不能でも不見識でもなく、一貫した国家戦略が垣間見える」（白木久文『老いる帝国のトランプ』）というのだ。

かつては古代ローマ帝国も、軍事費の増大と贅沢品の輸入で、財政赤字と貿易赤字に苦しんだ。米国はすでに古代ローマ以来の「覇権国の衰退パターン」にはまっついて、高関税の脅しやパナマ運河の奪還、グリーンランドの割譲：衰退を食い止めるためなら何でもやるぞ、というのがトランプだという。なるほど。

「数々の危機を克服できた古代ローマ人も、三世紀の危機は目前の対応に追われるのに終始し、そのため自分たちの本質まで変えた結果、危機はますます深刻化した」（塩野七生『ローマ人の物語』32巻「迷走する帝国」）

この本質とは「多様性を認め合うローマ人らしい寛容さ」なのだが、「ローマ人」を「アメリカ人」に置き換えてみたら、よく分かる。時には遠く古代ローマ史までさかのぼって、今の世の中をじっくり俯瞰してみるのも良い。

Stop, Look, Listen (To Your Heart)

高木 善祥

(SHEEPSHEEP BOOKS)

定休日の水曜日。店内で事務仕事をしていたので、SNSで告知はせずに看板だけ出してこっそり営業していたら、お世話になってる会社の会長さんがご来店。小一時間ほどおしゃべりした。

「友人と一緒に本を出そうかと思ってたんだけど、途中で面倒くさくなっちゃったんだよね」

とおっしゃるので、どんな内容なんですか？とたずねると、帰ってきた答えが

「婿養子の心得」と、「婿養子を受け入れる側の心得」だった。

地域によって受け入れ具合にかなり差があつて、「婿養子は祭りには絶対に参加させない」ところがある一方で、すぐ隣の地区は何のわだかまりもなく一緒に踊っているとか。

それに加えて自身の立ち位置や養子に入った家の地域内

でのポジションなど、変数がたくさんあるので、一筋縄ではいかない

イエ制度を維持するのが目的なので、もう少し丁寧に迎え入れられるのかと思っていたが、実際はそうでもないらしい。

「民俗学的にも貴重な資料になると思うので、絶対書いて紙の本で残しましょう！」

とお願いしておいた。

*

邯鄲堂さんから電話があり、

「お客さんから買取依頼があつたけど、ウチはいま買取していないので、高木さんいかがですか？」

とお話をいただく。ちょうど定休日だったので、その日の夕方にご自宅にお邪魔した。

二階のひと部屋が書庫になっていて、スチールの棚に本が整然と並んでいる。依頼主にお話を伺うと、亡くなられたお父さんの蔵書で、高校で国語の教師をしていたのとのことだった。

文芸書はもちろん、日本美術や民俗学・仏教・女性史と幅広いジャンルがあり、勉強熱心だった持ち主の歴史を感じさせる蔵書だった。特に塚本邦雄の著書が多く、短歌を主要ジャンルに据えている当店にとって大変ありがたい。

しかし、値段がつかないものもあり、またウチもストックを置く場所が広くないので、厳選して三分の一ほど運び出した。

残った分は業者に処分に出すそうで、もうちょつと倉庫が広かったら…とか貴重なものを見落としているかも…と思いつながら、ご自宅を後にする。

店に戻ってから、お礼がてら邯鄲堂さんにメールを送ると、すぐに「貴重な本を次につなげることができて良かったです」と、返信が届いた。こういった横のつながりはとても大切で、邯鄲堂さんとの関係性は競合ではなく「同志」である。近いうちにお店に行こうと思う。

*

一週間ほどかけて、本の状態をチェックし、リストを作成。確認していただくために依頼主にメールで送ると、「これから祖父の本も整理しようと思っっているので、またよろしくお願ひしまう」とありがたいお返事をいただいた。和綴じ本もあるそうで、果たして私の乏しい知識で貴重なものを扱ってよいものか、すでに不安でいっぱいだ。

*

鳥取県立公文書館から「オーラルヒストリー」シリーズの第二弾である、清末先生の本が入荷した。

鳥取の歴史や自然を存分に語られていて、これもまた貴

重な記録だ。

【参考文献】

『オーラルヒストリー「とつとりの記憶」2 清末忠人』
鳥取県立公文書館

第一弾の『平林鴻三』と合わせてぜひ。

『この本を盗む者は』深緑野分 角川文庫
本が苦手な少女が主人公のファンタジー。来年劇場アニメとして公開予定。

『現代民俗学入門』島村恭則 創元社
当店でもよく売れている入門書。

『小さき者たちの』松村圭一郎 ミシマ社
小さな営みから見えてくるものとは。

定有堂ビル2階 古書・新刊の本屋

SHEEPSHEEP BOOKS 店主 高木善祥

本を作る側から (29)

村瀬 謙介

(小取舎)

七月四日から八月一二日までクラウドファンディング(以下クラファン)を行っている。

映像作家でもあり、鳥取大学の講師でもある佐々木友輔氏が、二〇二一年から杵島和泉さん、Carlaさんと企画し活動している「見る場所を見る」鳥取の映画文化リサーチプロジェクト」の集大成となる本の刊行のクラファンだ。この話を最初にいただいたのが二〇二二年の五月。その時にパソコンの中に作った空のフォルダは、今年までひっそりと隅の方に置いてあった。二〇二五年に入って、佐々木氏から連絡があり、いよいよ始動。とはいえ、クラファン自体、他のプロジェクトを応援したことこそあったが、じゃあさてどうやるの？

SHEEPSHEEP BOOKS の高木店主が最近クラファンを勉強

しはじめているらしいという話を佐々木氏が聞き、村瀬、

佐々木氏、高木氏の三人が人生初のクラファンに立ち向かう。

まずはサイト選び。色々なクラファンのサイトがあり、それぞれに特徴がある。何にしようか。いちいちつまずいて止まってしまうおじさん三人。高木氏がホンバコの良寛くんの名前を出し、味方につけることに。最近、鳥取に来た方は知らないだろうが、良寛くんは二〇一五年に鳥取市街地にホンバコというブックカフェを作り、三年間実践的なまちづくりをしていた。今でこそ全国の色々な場所で見られるシェア型の一箱本棚(お客さんが棚主となって本を入れる。他のお客さんは読んでもいいし買ってもいいし)のスタイルをいち早く取り入れており、私はそれをこのホンバコで知った。毎日のようにイベントを行い、私も店内でDJをしたこともあった。現在彼はキャンプファイヤーの公式パートナーだということで、クラファンのいろはを私たち三人は指南していただいた。まずわかりやすいタイトルとトップ画像。良かったのは三人とも少なからず美的感覚を持っているということ。ほぼ同世代なので、通ってきたカルチャーも似ており、センスに対する話が勘所である。

クラファン開始前、私たちは趣旨に賛同してくれそうな方々にSNSや直接メールやラインで連絡をする。面白いことにほとんど三人とも候補に出した方がかぶらなかつた。ありがたいことにお礼も追いつかないくらい多くの支援をいただいた。二週間ほどで当初の目標を達成。応援者一〇〇名をネクストゴールに設定して今も走っている。

昔は映画館がたくさんあったが、テレビが世に出た頃に減り、ビデオが普及して減って、YouTubeが出てきてまた減って、サブスクができてさらに減った（レンタルビデオ店はトドメをさされた）。佐々木氏がリサーチする中で、鳥取にかつてあった映画館を調べると、映画館の写真が少なく記録がほぼないことに気付いたそう。みんな映画を観に行っているのだから、映画館を観に行っているわけではない。映画館の写真がほとんど残っていないという絶望は転じてCarraさんの再現したカラフルな映画館のイラストを使用するに至った理由の一つでもある。

今も映画を愛する人は自主上映会をしたり、自分たちで映画館を作ったりと、色々な映画愛を形にして映画文化を繋げている。この度のクラファンも、本が好きな人、映画

が好きなお人、鳥取にかつてあった映画館に思いを馳せる人など、支援・応援してくれる人の理由もそれぞれだ。

ちなみに今回のプロジェクトの肝、書店×出版×映画文化研究のメディアミックスは、角川映画へのオマージュです（笑）。

クラファンは奥が深い。これまで生きてきた集大成がある。多くの人の応援が掛け算のように力になる。本当に刊行やトークイベントが楽しみだ。

あ、他人事じゃなかった。これから作らないといけないなかったんだ。みなさんお楽しみに。

・小取舎の最新刊

『鳥取あれこれ』

内田克彦 著

本体一〇〇〇円

発行 2025.5



内坪井町日記（15）

齊藤 仁昭

（ケバブジョンソン・

元長崎書店勤務）

六月十一日

六月十一日から鶴屋百貨店にて「鶴屋の和菓子祭り」が開催された。熊本県菓子工業組合の主催で、私はイベント副委員長を仰せつかっているので仕切りがなかなかたいへん。前日には地元メディアの取材を受けるなど、慣れないテレビ取材で自意識過剰にインタビュアーに答えてしまったような気がしてそれが気になってしまっただるだるして、メンタルの弱さにへこむ。

組合の各店のどら焼きが数十種類並ぶのだがこれは楽しいんじゃないかと思う。そのほか各店の銘菓も並ぶ。いらっしやいませを発語しまくる。

今回の特別展示では、古書店で偶然発見された明治時代の菓子レシピ帖の再現菓子を試食できるという試みを行う。

興味を持ってくださる方が多く、ありがたい。試食を用意する数なども不安だったが、不足することはなく、胸をなでおろす。六日間なんとか乗り切る。閉店後のデパートでの撤収作業がなんかわくわくして好き。

六月十五日

熊本国際民芸館および熊本民藝協会の六十周年記念パーティーへ出席する。縁あってお声がけいただいたが、民藝の知識に乏しいもので恐縮してしまい酔えず。これを機に少しずつ民藝の勉強をしていかないといけない。

六月十九日

車検へ。点検は無事に終わったのだが、なんと車の税金を期日までに払いそびれていたらしく、その納税証明がないと車検は通らないとのこと。こういう公的な作業がとても苦手だ。

後日、市内の何とかセンターへ納税に向く。車検と納税ででかい金が失われ、税制や車検制度を呪う。でも安全は第一。

六月二十七日

一泊で長崎へ。熊本県菓子工業組合青年部の会合。電車での移動はなかなかの長旅。会議後の懇親会が思った以上に大盛り上がりで、かなり疲弊した。

長崎では飲みのにラーメンではなく「おにぎり」を食べる人が多いということを聞く。しかもおにぎり専門店があるとのこと。初耳だったが、言われてみれば確かに良さそう。おにぎりやさんに連れて行ってもらったが名前は失念。味噌汁もうまくて、おにぎりは3個も食べてしまった。翌朝は始発で熊本へ戻る。家族で休日。

七月一日

夜から高熱。長崎のせいかな。翌朝、病院にてコロナと診断される。四十度近い熱が出て、血中酸素飽和度も九四パーセントほどに落ち込み、入院せんといかんのかなと覚悟したが、どうにか持ち直し、自宅療養で済んだ。数日間寝て起きてを繰り返すだけ。ようやく落ち着いて出社したのは翌週。体力がものすごく落ちていて、記憶力も低下している気がする。番車を持って2階から1階に階段で降りら

れないほどの脱力感。

この体調不良ではあるが、八月以降ライブ予定を詰め込まずに。健康を回復させねばならない。以下、現時点でのスケジュール。お近くの方、ぜひ。今年もフジロックには呼ばれなかったなあ。

- 8月2日 下北沢BASEMENTBAR
- 8月7日 下北沢LIVEHAUS
- 8月16日 東高円寺UFOCLUB
- 8月23日 神戸ヘラバラウンジ
- 8月28日 新代田FEVER
- 8月30日 名古屋金山ブラジルコーヒー(ワンマン)
- 8月31日 名古屋金山ブラジルコーヒー
- 9月27日 茨城かまねこ堂
- 10月4日 柴崎MOD
- 10月26日 名古屋KDHポーン

論語について(3)

小原 修治

(県立高校教諭)

湯梨浜町松崎在住)

子曰、弟子、入則孝、出則弟、謹而信、汎愛衆而親仁、行有餘力、則以學文。(学而篇第一・第六章)

子〔し〕曰〔い〕はく、弟子〔ていし〕、入〔い〕りては則〔すなは〕ち孝、出〔い〕ては則〔すなは〕ち弟、謹しみて信、汎〔ひろ〕く衆を愛して仁に親しみ、行なひて余力有れば、則〔すなは〕ち以〔もつ〕て文を学べ。

「弟子」は、本章全体の主語で、ここは年少者の意味。なぜならば、その後と言う「孝」「弟」がいずれも年長者への従順の徳を意味する語だからである。「弟子」に続く「入」「出」の語については、『論語』子罕篇に「出則事公卿、入則事父兄。(出〔い〕ては則〔すなは〕ち公卿〔こうけい〕に事〔つか〕へ、入〔い〕りては則〔すなは〕

ち父兄に事〔つか〕ふ」と見えるのを参照すれば、「入」とは「孝」を実行するために父兄に仕えようと家の内に入ることを意味し、「出」とは「弟」を実行するために公卿に仕えようと家の外に出ることを意味するだろう。『論語』には「宗族孝を称し、郷党弟を称す」(子路篇)という句も見えるから、「孝」の語は父兄のような宗族の年長者への従順の徳を表わし、「弟」の語は公卿のような郷党(村里)の年長者への従順の徳を表わすと考えられる。

これに対して、「謹しみて信」の「信」は、対等な関係にある者への徳を表わす語である。同じく学而篇の「與朋友交而不信乎。(朋友と交はりて信ならざるか)」や、「與朋友交、言而有信、雖曰未學、吾必謂之學矣。(朋友と交はるに、言ひて信有らば、未〔いま〕だ学ばずと曰〔い〕ふと雖〔いへど〕も、吾れは必ず之〔これ〕を学びたりと謂〔い〕はん)」などの章を見れば、「信」は「朋友」と結びつきやすいことが分かる。「信」の語は朋友のような対等な関係にある者への誠実の徳を表わすと考えられる。

「孝」「弟」から「信」へ続き、次に「汎〔ひろ〕く衆を愛して仁に親しみ」と来る。通説では、この句は民衆を愛して仁者に親しむことだと解釈されている。この「仁に親しむ」を仁者に親しむことだとする説は、「仁徳有る者に見〔まみ〕えて之〔これ〕に親しむなり」(皇侃『論語

義疏』)などの古注に拠るが、そもそも年少者に「親しむべき仁者を見わける力があるだろうか。これについては、黄懷信『論語彙校集釋』が「『親仁』は辞ならず、仁者と釈するは是「ぜ」に非「あら」ず、「人」の字の誤まりと為「な」すを知らざるなり。「親人」は、親しく人を愛す、親しく人に近づくを謂「い」ふなり」と説き、「仁」を「人」の語で解するのが良いと思う。「愛衆」という不特定多数の人を対象とする抽象的な思想を前提に、「親人」という個人を対象とした具体的な徳を実行せよとの教えだろう。

なお、「仁」「人」は通假字であり、同じ例は『論語』に他にも見える。雍也篇に、「宰我問曰、仁者雖告之曰井有仁焉、其從之也(宰我問ひて曰「い」はく、仁者は之「これ」に告げて井に仁有りと曰「い」ふと雖「いへど」も、其「そ」れ之「これ」に従はんやと)とあり、その「井に仁有り」の句について、朱子の『論語集注』(新注)が「仁有り」の「仁」は、当「まさ」に「人」に作るべし」と説くのがそれである。弟子の宰我は孔子に対して、仁徳のある人は井戸に人がいることを告げられた時、その人に従って自分も井戸の中に入るのか、と質問したのである。

最後に、「行なひて余力有れば、則「すなは」ち以「もつ」て文を学べ」について。「行なふ」とは、「孝」「弟」「信」「親仁」などの徳を実行することであり、その上で

なお余力があれば「文を学べ」というのである。「文」は詩書礼楽のことだろうが、重要なのはむしろ、伊藤仁齋が『論語古義』の本章のくだりで説く、次のような点にある。「蓋「けた」し古「いにし」へは徳行を以「もつ」て学問と為「な」す。故に学問既に成りて道徳自「おのづか」ら立ち、見聞益々広くして躬行益々篤し。後世、徳行を以「もつ」て徳行と為「な」し、学問を以「もつ」て学問と為「な」す。故に既に学びて、又た徳行を脩「おさ」め、以「もつ」其の意に副「そ」ふ。故に毎「つね」に文学勝「まさ」りて、徳行及ばざるの患「わづら」ひ有り。未「いま」だ徳行に及ばずして、流れて記誦文詞に至りて止まる者有り」。学問の第一義は、「徳行(徳を実行すること)」である。が、後世、学問と徳行とは別のものとみなされるに至った、と仁齋は言う。その結果、本来は二義的だった「文を学ぶ」ことや「記誦文詞(書物を読み、記憶すること)」「こそが学問だと勘違いする者が多くなってしまう。学者はその典型であり、彼らは孔子の学問の意義を多く忘れている。人口に膾炙した「論語知らずの論語読み」という箴言は、この辺りの事情を市井の人々が批判したものと思われる。

究極の臍の緒

古賀 啓三

(米国ミシガン州在住)

密着した体験を「臍の緒」などと書いてきた。またまた英語の知ったかぶりで恐縮だが(一応アメリカ人なんですけどね)、Mother of と、という言い方があり、これは「究極の」といったような意味。フセインが湾岸戦争をMother of War、と呼んだのは有名。死というのは、Mother of umbilical cord (臍の緒) なんてではないだろうか。

Mortality という言葉を検索するとまず「死の不可避性」とあるが、「必死性」というのもあって、個人的にはこれが気に入った。Mortals にはまず「定命の者」、だが、これも「必死者」でいいんじゃないやね、などと思う(悪足掻きする人のようでもあるが)。

先号でバルガス・リョサ、丸谷才一、大江健三郎について触れたが、これらの作家に共通するのは、三者とも鬼籍に入られていることである。

小説家は、どうせ死ぬのになんで小説なんか書くのか。

今月書こうと思っていた二冊はどちらも大長編で、原稿締切までに読み終わりそうもないので、普段から結構気にはなっているんだけど、なかなかきちんと思える暇のない「死」について考えてみようと思う。

このところ、書かれることを触発する、作家の実人生と

一般的な死の恐怖、というのは、虚無の永遠性、連続性にあるんじゃないかと思う。三年前、父が九十三で亡くなり、病院から、父が暮らしていた箱崎にある高齢者向けマンションに独り戻って、七階の部屋から国道三号線の途切れることのない車の流れや、歩道をゆくまばらな歩行者を眺めていたら、雨が降ってきた。朝から病院に呼び出され、何も食べておらず空腹でもあった。そして、こうして通りを眺めている自分。突然降り出す雨。空腹なので、食事をしにもゆくだろう、そういったイベント同様、死というのは、Continuum、ずっと続いてゆく、永続する状態ではなく、Spot、点として発生するイベントなんだなあ、と感じた。車と人と雨を腹をすかせつつ、眺めながら。そして、これら、ありふれたイベントたちが、ことさらに思い出されることのないのと似て、死など、思い出す自分すらいない。

Mortals の対義語は Immortals で、不死の人、だが、死

ななかつたら小説など書かないのではないか。死ぬから書くのである。

幽けき、儂き、哀れの心情

成すことのないだろう、悔い

生き残るための利己、犠牲、憎悪

こういつた小説の温床（＝Human condition）に、死を意識せずに至ることがあり得るだろうか。書かれることを触発する、作家の実人生と密着した体験を「臍の緒」と呼ぶとすれば、死は Mother of umbilical cord、究極の個人的体験であろう。

死なくして生などあるか。

死んでない、が生きている、なのに。

紙数が余ったので、二つの長編の合間に読んだ小説について書く。川端康成の『眠れる美女』。変態小説である。

死がなければ生がないように、性もないのらしい。

主人公の江口は、老人仲間に紹介され、薬物で昏睡させた全裸の少女、十六歳から、はたちまえの娘たち、と添い寝して、見つめたり触ったり嗅いだりできる、というサービスを提供する宿の馴染みとなるのだが、対象は「安心できるお客様」だけ。このとき江口六十七歳。

宿のおかみは十六の娘は見習いの子、はたちまえのは、

今夜の子は慣れておりますわ、との前口上。「慣れているって、どんな風に慣れているの？ 眠りつきりてさ」「さあ……」と要領得ない。そんなとき、この宿を紹介してくれた老人仲間が、他の共通の知人がこの宿で狭心症の発作で死んだことを教えてくれる。相方の娘は老人の断末魔のあがきで、首から胸にみみずばれをつくられていたが、目を覚まさぬまま客の死骸は処理されていた。目覚めにおかみが傷を指しながらこの顛末を伝えると、「いやなじい」。五人目の娘はこれまでの色白で美しい娘たちと比べると、「まったく野蠻のよう」で、ちちかさが大きく紫すんで黒く、肌は黒光りし、かるいわきがあるのだが、「いのちそのものかな」と江口は呟く。「こういう娘に暴力をふるってこそ、若さをゆりさましてくれそうである」こういう作家を文豪と崇める国が祖国でよかった。

翌朝、江口が目覚め、黒い娘の方に寝返ると、「安心できるお客様」に生気を吹き込んでくれるはずの野蠻の娘が、眠らせる薬が強すぎたのか、息絶えており、老人は見苦しく狼狽する。

淫靡で、猥褻で、行間から生臭い匂いと死臭が立ち昇ってきてそうな、美しい小説である。

夏を飲む

ムラカミヒロミ

(フライング・ブックマン)

今は昔、昭和の御代も中頃のこと。

夏の飲み物は、もっぱら瓶入りであった。

缶入りは僅かに、明治のオレンジジュースを覚えているだけだ。細めの缶で(たぶん二百ccなかつたと思う)缶切りのような穴あけ器が付属していて、対面する二箇所(時計で言えば六時と十二時)に穴を開けて一方から飲むというもの。

瓶入りにしても、それほどバリエーションが豊富にある訳ではなく。

流石に、四十年代頃には、コカ・コーラやファンタなど、人工甘味料と合成着色料で彩られた(一)ものが見られるようになったが、それ以前は、バヤリースやキリンのオレンジ・ジュースか、コーヒー牛乳(牛乳瓶ではなく、細くくびれた瓶入り)、三ツ矢サイダー、ラムネくらいだった。

(「ブラッシー」という、プロレスラーみたいな名前の飲料もありましたな)

それとて、日常的に飲める訳ではなく、ラムネは海水浴や打ち上げ花火の時、ジュースやサイダーは、誕生日やクリスマスといった特別な日のものであった。

では、夏の暑い日、家庭では何を飲むのか。

麦茶はありますわな。

暑い中、朝から大やかんで煮出して、水を張った金盥に漬け、蛇口から水をチョロチョロ出しながら冷やすのが日課であった。

これとは別に、麦湯というのもありましたね。

辞書的には、麦湯と麦茶は同じものだが、我が家では使い分けていた。江戸時代に供されていた「麦湯」がどちらを指しているのか判然としないが、喫茶史的には、麦茶の前身、あるいは初期形態とみなされているようだ。

麦を炒った後、挽いて粉にしたものを湯に溶いて飲むのが麦湯。殻付きのまま麦を炒って、それを煎じて飲むのが

麦茶。

炒った麦の粉だから、湯に溶いても、完全な水溶液にはならず、粒子が残る。舌の上でザラザラする食感がちよつと思議で、これを併せ楽しむのが麦湯の身上なのだろう。子どもは、砂糖を加えて飲んだ。

ちなみに、この炒った麦粉のことを、所によつては「はつたい粉」「麦こがし」「炒り麦」などと呼ぶらしい。

この他、粉末飲料というのも花盛りであった。

今は、スーパ―や百均の駄菓子コーナーくらいでしか見ることもなくなつたが（逆に、スポーツドリンクやカフェオレ、ミルクティー、緑茶の類は多い）、あの頃は、子どもがいる御家庭の常備品であった。

渡辺のジュースの素というのが定番で、オレンジ味のほか、パイン、ぶどうがあり、ソーダ味のいちごメロンもあつた。

大きな缶入りを買い置きして、ひと夏、飲み続けるのだが、蓋をしっかり閉めなかつたり、濡れたスプーンなどを使うと、靦面シケツてしまうのが難ではあつた。

夏に限らないが、粉末ミルクの類も常備していた。

スキムミルク（雪印だったか？）は頑丈な箱型のパツケージで、アルミ箔で内貼りされており、鳥の嘴のような注ぎ口を引っ張り出して、直接カップやグラスに振り入れるタイプであつた。（キョロちゃんのチョコボールを想像されたい）

メリーミルク（こちらは明治）は、円筒形の缶入りであつたが、これは絵柄に特徴があつた。

濫澤龍彦がエッセ―に書いているので、御存じの方は御存じと思うが、女の子がメリーミルクの缶を抱えている図である。そして、その抱えた缶にも同じ絵が描かれ、さらにその中の缶にも同じ絵が…という、入れ子構造になつていたのであつた。

今でも、雑誌の表紙などに、モデルが雑誌を手に持ち、その雑誌が当該号と同じ図柄で、その中にまた同じ図柄が…と無限連鎖になつているのがあるでしょう。

あの缶は不思議だつた。

この空の下で生きていく。

三浦 永理

(三十歳・女性)

七月末、晴れて私は何者でもなくなつた。これから二月弱、イギリスの修士課程に入るまでは所属もない。

教員が最後に辞めるタイミングでは、離任式が行われるので、そこで話すことになつていた。生徒が教室から出てきて、学校の中心の吹き抜けに立つ私を見下ろしたとき、その風景に圧倒された。何を喋りたかつたのか、忘れてしまふさうだつたけれど、自分が留学する理由を話すためにも、このことは言わねばと気を取り直して

「自分の隣の人と違う意見のこともあるかもしれない。違う文化の人で驚くこともあるかもしれない。それでも、嫌い・間かないとならずに、一度立ち止まる人でいてください」

というようなことを言った気がする。そう話したのは、私自身はそれが教育の目的だと考えてきたからだ。

一方で、現代の社会は極右の居場所を用意しているところがある。そのような感情を頭では理解できるが、正直なところ、私は心では理解できずに、嫌悪してしまっている。

ただ、立ち止まろうと努力をしてはいる。頭ごなしに批判してしまつては、私も思考停止状態を認めていることになるからだ。

Big Theaterであつたシヨン・ベーカー監督の初期傑作選は、奇しくもそんなテーマと重なつていた。四作品のうち、三作品を見ることができた。アカデミー賞をとつた『アノラ』は色に溢れた作品のような印象を受けるが、初期の作品はより実直にドキュメンタリーのように、そのなかには搾取の構造が隠されてもいる。

『テイクアウト』はニューヨークの中華料理店の配達人が主人公だ。彼はアメリカへの移民である。冒頭は、彼が借金取りに追われ、一日で八〇〇ドルを用意しなければならぬ状況ということが示される。大雨のニューヨークを主人公は自転車で走る。チップで稼ぐ。その繰り返し。移民ゆえの寄る辺のなさが鮮明で、金のための苦しい場面が続く。中華料理店にいる男たち同士の友情が鍵になつてくる。(ちなみにほぼ中国語での会話だ。)

その次に観たのは、今回のチラシでも全面に出されている『スターレット』だつた。女優志望のジエーンは、ガレージセールで大金の入つた魔法瓶を見つけた。その持ち主である老女・セイデイへの後ろめたさからか、交流を始める。そのジエーンはフロリダから出て、ロサンゼルスで友人・

メリッサの家に間借りしている。葉をやっている彼氏と同居するメリッサも、ジェーンと同業者で、二人は女優志望と言いつつ、アダルトビデオに出演するポルノ女優だ。性産業のような際どい世界を描きつつ、ロサンゼルスの日差しはあたたかい。ラストには、その日差しの中で、セイディの真実がちらりと明かされる。

最終日の夜に駆け込んで観たのは、『プリンス・オブ・ブロードウェイ』。ニューヨークでブランド品の模造品を売るガーナからの移民であるラッキーは、突然前の彼女から「あなたの子供よ」と赤ちゃんを押し付けられる。そこからは、赤ん坊より泣きじやくるラッキー。二人の共同生活が始まる。果たして二人は親子なのかすら、あやしい。そのなかで、二人はだんだんと親子になっていく。後半になって、この赤ちゃんは「プリンス」と名付けられる。プリンスの表情ひとつひとつが物語を牽引していく。一方で、ラッキーの働く店の店主は、家庭での問題を抱えながら生きていくことが描かれている。

どの作品も主人公たちは自分たちの故郷から移り住んでギリギリの状況で挑戦している。金銭的にも、法律的にもさまざまの意味で追い込まれていても、彼らは自分たちの尊厳を守りながら生きていくのだ。

jig theaterの柴田さん・三宅さんによると近年のショー

ン・ベーカー作品は、保守からもリベラルからも支持されているようだが、初期の作品たちは移民の姿を多く描いており、かなり左派寄りの作品になっている。トランプタワーが輝くニューヨーク。テック企業が多くあるカリフォルニア。それぞれに、ギリギリの現実を生きている人がいるのだ。彼らの生を侮ったり、奪ったりすることを人間がしてしまっていないのだろうか。

『テイクアウト』の主人公は、新しいアメリカの文化に入りながら、借金に追い込まれ、配達で笑うことすらできない。中盤では同僚と笑顔の練習をする。そうやって、移民が新しい文化に馴染むのは相当な努力を要すると『文化はいかに情動をつくるのか』（バチャ・メスキータ）で指摘されている。異なる文化の情動に適應する、つまり情動リテラシーを身につけることは、周りの文化に対してダンスするようなもの。違うダンスをしてみれば、いつまでも馴染めないと語る。無理して笑顔を作る主人公を見つめながら、私は自分が移民として生きる一年のことを思った。

『思わず、涙さん

とつとりからの返信』

三浦 永理



氷



あきの素生

(くうねるめがね)

あつという間に梅雨が終わった。大雨の翌日に出張し、
昼食を取ってお店の外に出ると、目を刺し音を消すような
白い日差しが夏を感じさせた。案外昨日の雨で梅雨が明け
たりしてなあ、なんて考えていたら、本当に梅雨明けした。
え、梅雨明けってこんな時期だっけ？と訝しんでいたら、
過去最も早く明けた梅雨だというので得心が行った。決し
て雨が好きなわけではないが、長く暑い夏も、まったく好
きじゃない。始まるのか、夏が、と考えるだけで、どっと
疲れた。

夏でも常温や温かい飲み物を飲んだ方が胃腸によいと聞
く。日頃は少し意識して、なるべく常温以上のものを飲む
ようにしているが、この沸騰するような気温の中では、と
ても我慢できない。そんなに暑い場所にいるわけではない
のに、じりじりと身体の内側に熱が溜まっていて、酸欠

の魚が水面で口をぱくぱくさせているような息苦しさを感
じると、もうお手上げ。身体は自分に必要なものを欲する
力を持っているはずだというの言い訳にして、欲望のま
まにきんきんと冷えた水分を口にする。氷を浮かべたアイ
スコーヒーは至福である。胃腸よ、すまない。

そんなわけで(？)、日頃チョコミン党の私も、夏とお
酒を飲んだ後は、氷系アイス一択だ。きんきんと冷やされ
たい。三角形に切られたスイカの形を模したアイスキャン
ディーは、夏のレギュラーメンバーだ。チョコレートの特
が効いている。子どもの頃から好物で、冷凍庫に常備して
いると、大人になった喜びを感じる。南国名物の白熊は、
学生時代の九州旅行でぜひ食べたいと思っていた代物だ。
ところが、気ままな青春18きっぷの旅、九州に行くこと
しか決めていなかったため、友人と最終目的地を巡って鹿
児島か、長崎か、の話し合いになり、結果長崎に行くこと
にしたため、長い間憧れの存在だった。そのうちコンビニ
などでカップ入りアイスとして売られるようになって、た
まのごほうびとして食べることができるようになった。今
や廉価版やその名を冠した箱入りのアイスバーなどもあり、
しよっちゅう口になっているが、よく考えてみると本家の白
熊は未体験のままなので、やっぱり憧れの氷菓子である。

さて、望むと望まざるとにかかわらず、急いでやってきた夏の日には、何が食べたいかと自問したとき、真っ先にかき氷が浮かんだ。目の前にかき氷の情報があり、それを見て、ああ、かき氷食べたいな、と思うことはある。が、自発的に、真っ先に、かき氷を食べたいと思うことはあまりない気がして、少し驚いた。それほど暑いということか。

近年、特別なかき氷を食べさせてくれるお店が増えていく。かき氷という選択肢の存在感が増した理由のひとつだろう。特別なかき氷は、繊細な味わいや種々のトッピング、ポリウム、美しさなどを兼ね備えている。さらに、この暑さを和らげてくれるとなれば、多少値が張っても食してみたいと思うのは当然と言えよう。

そんな豪華なかき氷を夢見ていたら、ふと、そういえば家でかき氷を作っていたなと思いついた。家にあつたかき氷器は、ハンドルを手で回して氷を削るタイプのもの、削るのに結構力が要った記憶がある。平たい円錐とか、カップアイスの容れもののような専用容器で作った氷を、ハンドルに全体重をかけて削り出す。懸命に削るので、身体を冷やすどころか、口に入る前にむしろ汗をかく。今

ではよく見かける「ふわふわ」としたのではなく、食感は一しゃくしゃく、湿度は高め。シロップはほぼほぼイチゴ、たまにメロン。何の工夫も変哲もなく、お祭りの屋台に感じる高揚もない。そんなかき氷だが、花火遊びにも匹敵する夏休みの楽しみだった。頭をきーんと痛ませたり、舌を赤くしたり緑にしたり、かき氷は食べものであるだけでなく、体験だったんだなと今更ながらに気が付いた。

氷はとけてゆく。暑い暑い夏の中では特に。あつという間に。氷が氷であるひとときに救ってもらおう日々だ。

案内



ドラマメリア (座敷わらし)



定有堂教室「読む会」 (講師 岩田直樹氏)

定有堂教室「ドウルーズを読む会」

定有堂教室「読書室ビオトープ」

それぞれ会場は とりぎん (県民) 文化会館

葉香太極拳クラブ

会場 麒麟スクエア (市役所二階) 水曜夜・土曜昼

・定有堂教室と太極拳の詳細は

下記の、QRコード参照

(@ドラマメリア)



『音信不通』紙版の置き場

・県立図書館2階パンフコーナー・森の生活者

・邯鄲堂・上田ビル (ボルゾイレコード) ・食堂カルマ

・SHEEPSHEEP BOOKS (定有堂ビル2階) ・エスキース (倉吉)

・定有堂ビル2階「音信不通」編集部

・編集後記:

出勤の朝、マンションの駐車場に、これから海水浴という風情の車が。二十歩走れば山に飛び込めるような山あいの町育ちだったので、海水浴は一日がかりの大イベント。祖母が丹精込めて畑で育てたトウモロコシをおやつに持ち、浮き輪やゴムボートを車に積み込み、都会に住むイトコ一家 (同じ県内だがこちらは南側) も勢ぞろいして、出かける。ひと夏に一度きりのお祭り騒ぎだったものです。

「音信不通」へ寄稿してくださっている方が、鳥取を離れて新たな挑戦へ向かわれます。どうぞお元気で!

ドラマメリア (編集長)

猛暑つづきですね。八月十八日(月)の鳥取県図書館大会の準備中、本屋や読書についての本をたくさん読んでいます。分科会で「大人の読書」を中心に三砂慶明さんと対談します。アドリブですが、わたしのテーマは「読書の身の丈」の予定です。米子市のコンベンションホール。オンライン参加も可能です。

奈良敏行 (発行人)

